

令和4年度文部科学省委託事業 「学力調査を活用した専門的な課題分析に 関する調査研究」

保護者に対する調査の結果を活用した家庭の社会経済的背景
(SES) と学力との関係に関する調査研究

国立大学法人 福岡教育大学

本研究の目的

- I. SES (Socio-Economic Status) 指標の作成
- II. 家庭の社会経済的状況の変化の分析
- III. SESと学力の関連を分析
- IV. SESと学力の関連の変化を分析

2013年, 2017年, 2021年度の「保護者に対する調査」のデータを利用して, これらの分析を行う。

本日の報告内容

- ① 過去3回の調査における家庭の社会経済的状況の変化（1章）
- ② 過去3回の調査におけるSESと学力の関連の変化（3章）
- ③ ジェンダーと学力（4章）
- ④ 外国にルーツを持つ人々の学力問題（7章）
- ⑤ 「保護者に対する調査」＋「経年変化分析調査」（9章）

今回報告するのは、分析結果の一部になります。
他の分析結果については、報告書をご参照ください。

結果の解釈に関する留意点

- 「保護者が大卒の子の学力が、非大卒のそれより高い」とは・・・

「保護者が大卒の子どもたちの得点の平均値」と「保護者が非大卒の子どもたちの得点の平均値」を比べたとき、前者の方が高いという意味。

1. 本報告でいう「学力」は、あくまで学力調査で測定された得点である。
2. 保護者が大卒（非大卒）の子どもの中にも、得点の低い（高い）子は多数いる。
3. あくまで平均値の差を記述しただけであり、「保護者が大卒になると子の学力が向上する」といった因果を主張しているわけではない。
4. 「大卒／非大卒」だけでなく、「男子／女子」「外国にルーツを持つ人々」等も同様である。

保護者の学歴・年収等が上昇している！

表 1.1. 両親学歴（大卒数の割合）

	小学校			中学校		
	2013 年度	2017 年度	2021 年度	2013 年度	2017 年度	2021 年度
0 人	60.9	56.8	50.9	63.7	62.1	56.4
1 人	27.8	28.8	30.5	27.1	27.6	29.3
2 人	11.3	14.3	18.6	9.2	10.2	14.3

単位：%

「両親ともに大卒」の保護者が増加している。
⇒ 同時に、世帯年収・父母年齢も上昇
⇒ 親職「常勤」の割合も増加
※ 「働く母親」が増えていることが要因か？

保護者の学歴・年収等が上昇している2

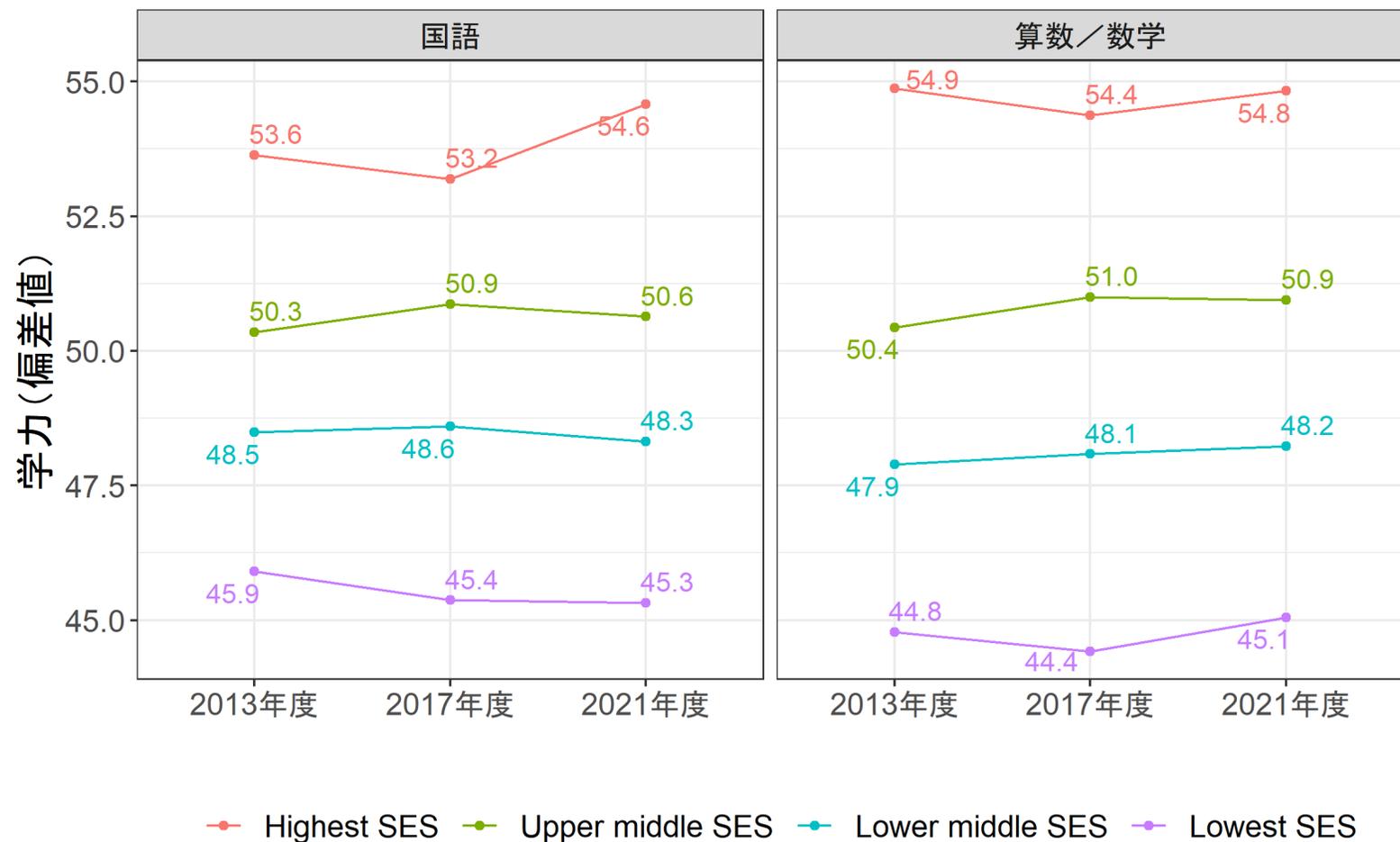
表 1.8. 教育支出

	小学校			中学校		
	2013 年度	2017 年度	2021 年度	2013 年度	2017 年度	2021 年度
支出はまったくない	13.2	14.2	17.3	16.6	18.2	19.0
5 千円未満	14.0	13.2	11.8	6.4	6.8	5.9
5 千～1 万円未満	23.4	22.2	20.7	12.4	9.8	9.5
1 万～2 万円未満	28.2	26.3	23.4	19.7	17.2	15.4
2 万～3 万円未満	11.8	12.7	12.9	25.7	24.2	21.0
3 万～5 万円未満	5.6	6.9	8.1	16.4	20.2	23.3
5 万円以上	3.8	4.5	5.9	2.8	3.7	5.9

単位：%

「5万円以上」「3万～5万円未満」が増加する一方で、「支出はまったくない」も増加。
⇒ 教育支出の「二極化」が進んでいる。

SESと学力の関連は2013年度以降ほとんど変わらない

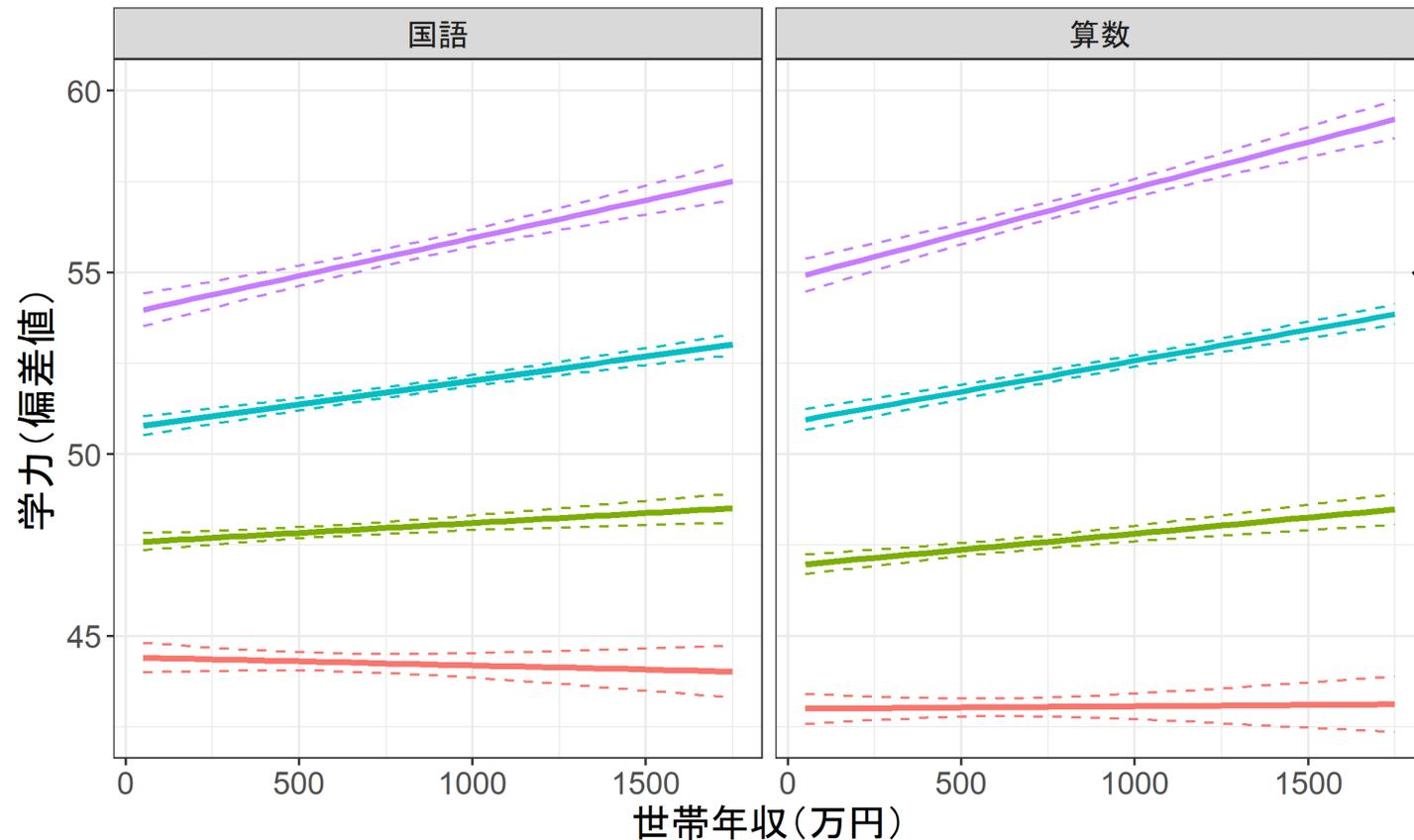


Highest SESがもっとも高く、Lowest SESがもっとも低い。

その差は、だいたい10ポイント前後。

図 3.3. 学力格差の経年変化 (中学校) 7

学力と世帯年収・教育期待に交互作用がある



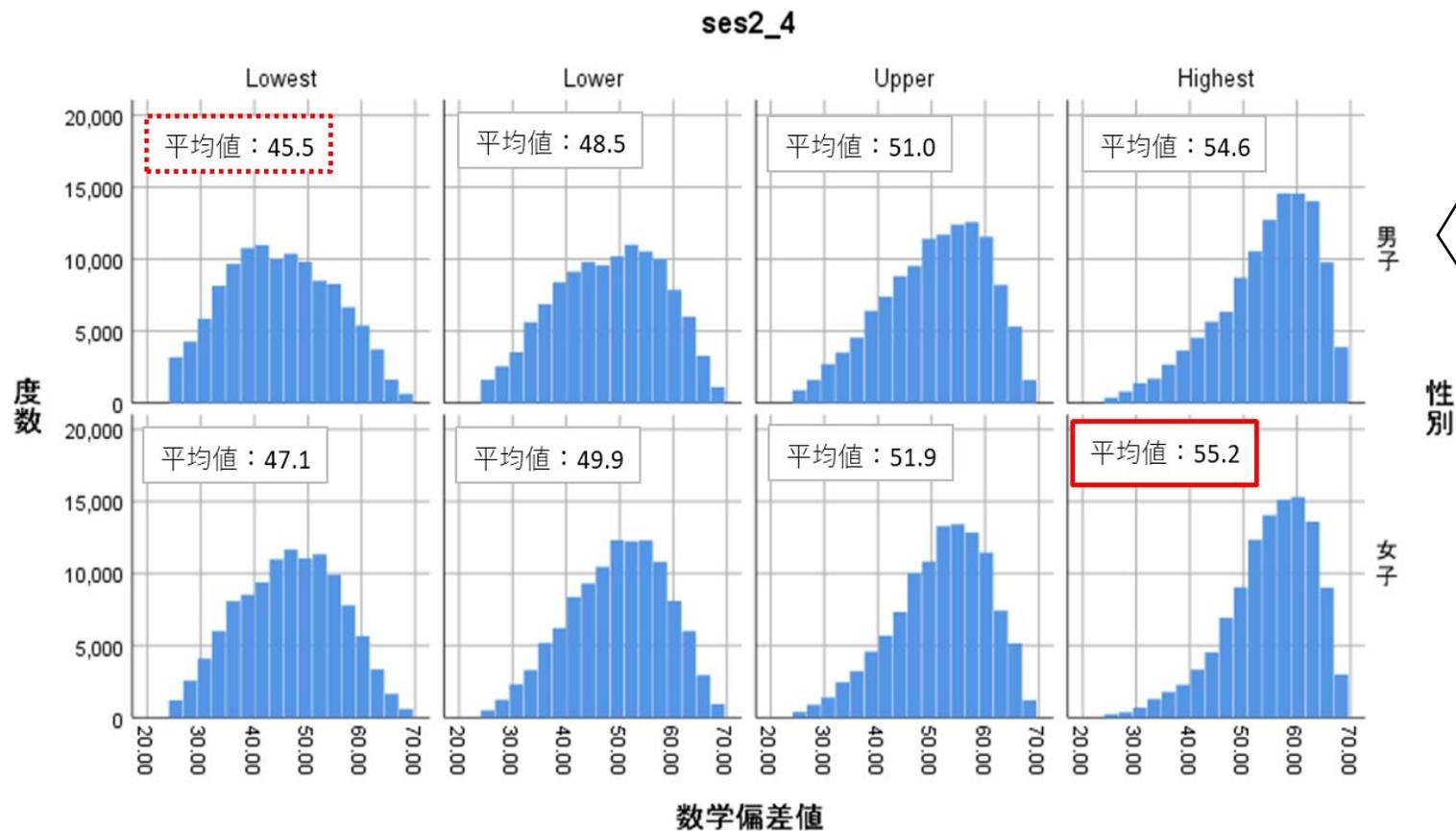
教育期待（どこまで進学
したいか）によって，学
力と世帯年収の関連が異
なる。

⇒ 教育期待が高い方で，
世帯年収と学力の関連が
強まる。

— 高校まで — 短大・専門・高専まで — 大学まで — 大学院まで

図 3.7. 世帯収入と教育期待の交互作用 (2021 年度 : 中学校)

ジェンダーと学力I

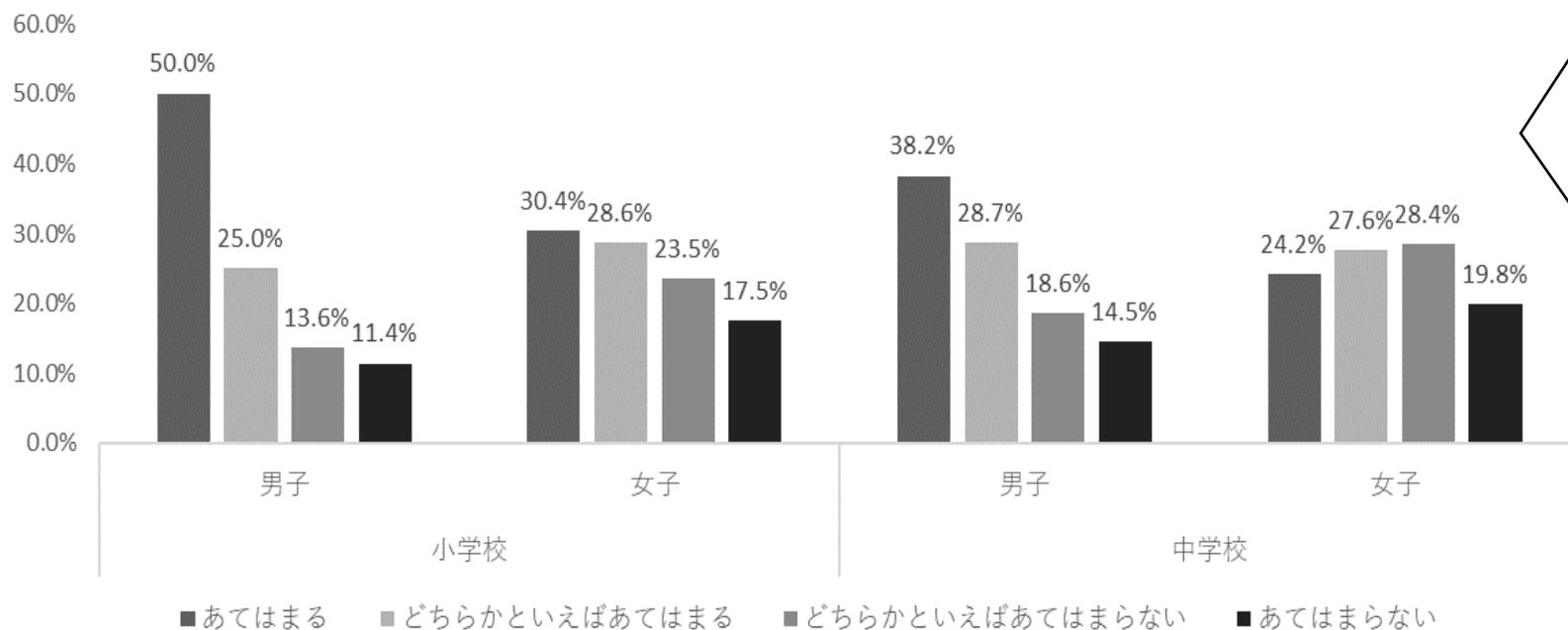


女子の方がSESによらず、
得点が高い傾向がある

Lowest SESの男子が
(国語・算数／数学を問
わず) 得点が低い。

weightにより重み付けされたケース

ジェンダーと学力2



「算数・数学が好き」という設問に対する回答の男女差が大きい。

男子に比べると、女子は得点がやや高いにもかかわらず、算数・数学が好きではない。

図4.13. ジェンダー別にみた算数・数学が好きかどうかの分布

外国にルーツを持つ子どもと学力I

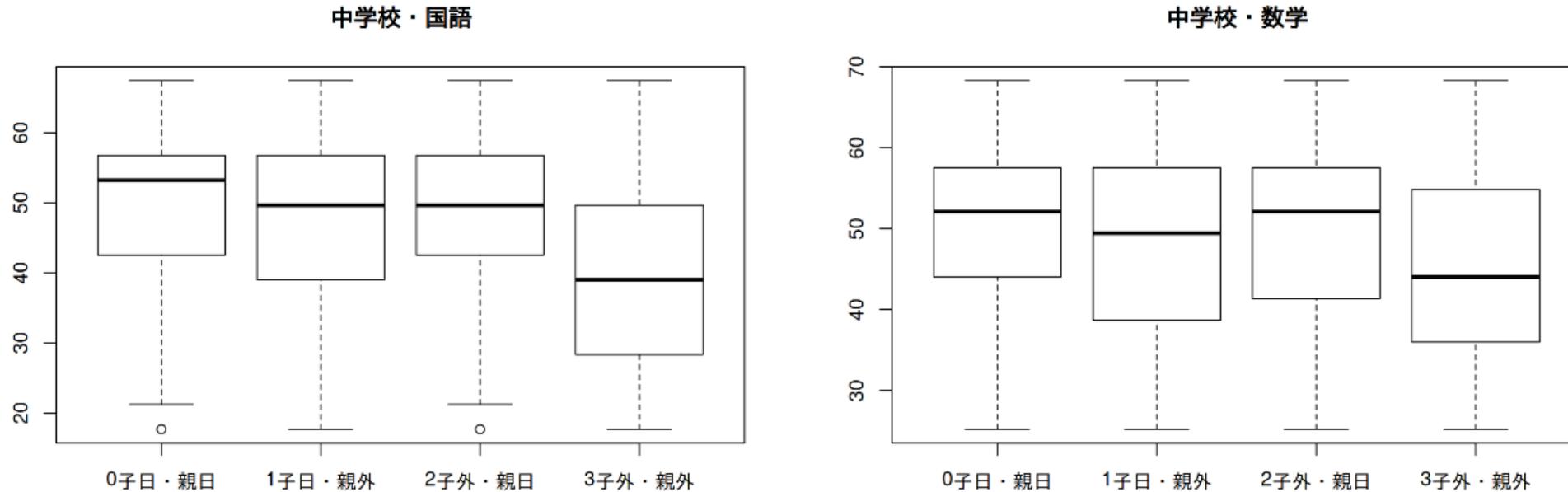
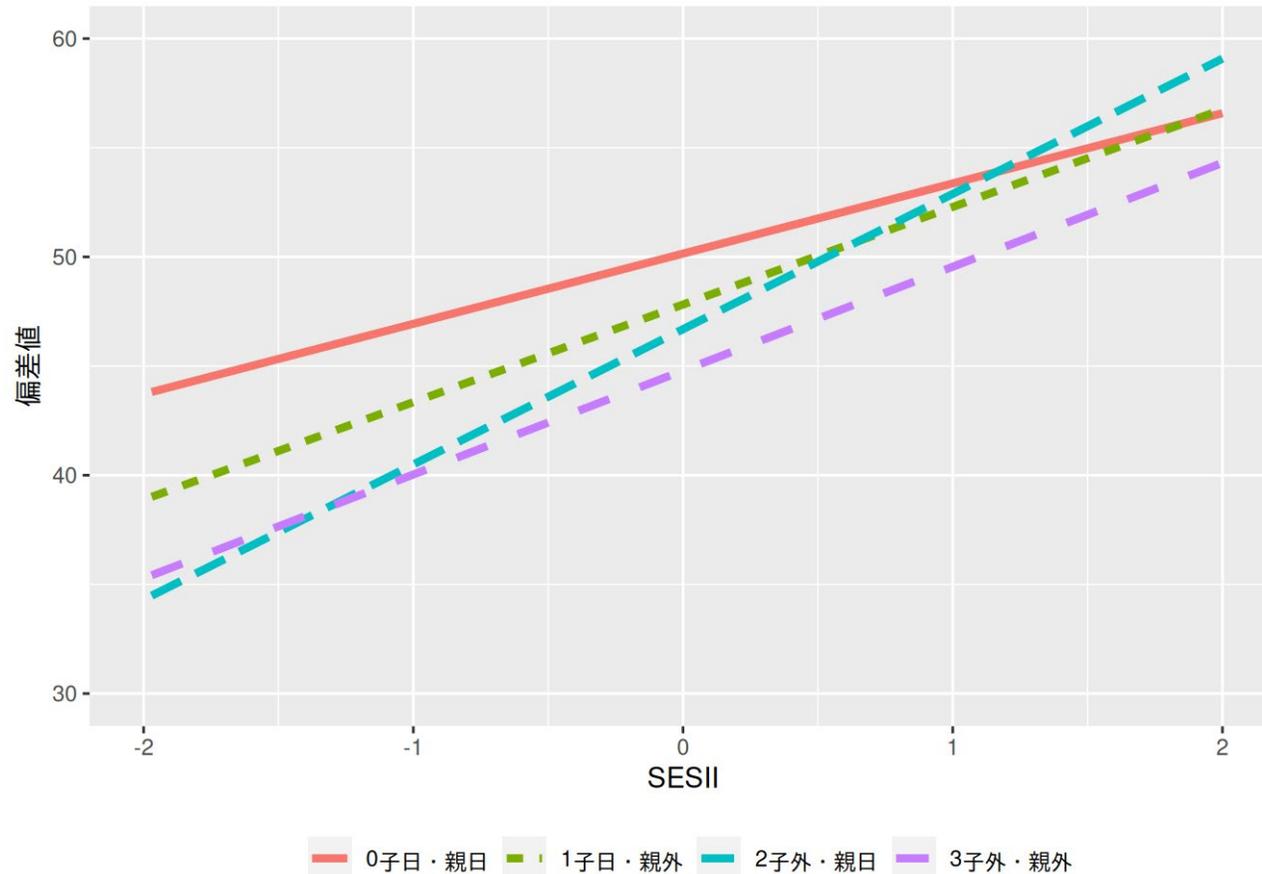


図 7.2. 中学校 (左: 国語 右: 数学)

小学校・中学校ともに、「親外国生まれ・子外国生まれ」の成績がもっとも低い。とくに国語で顕著。

外国にルーツを持つ子どもと学力2



低SESでは、外国にルーツを持つ子どもの点数は低いが、高SESでは差が縮まる。ただし、「親外国生まれ・子外国生まれ」については一貫して低い。

※小学校のみ。中学校は、一貫して外国ルーツの子どもたちの点数が低い。

図 7.5. 交互作用 (小学校・国語)

経年変化分析調査＋保護者に対する調査！

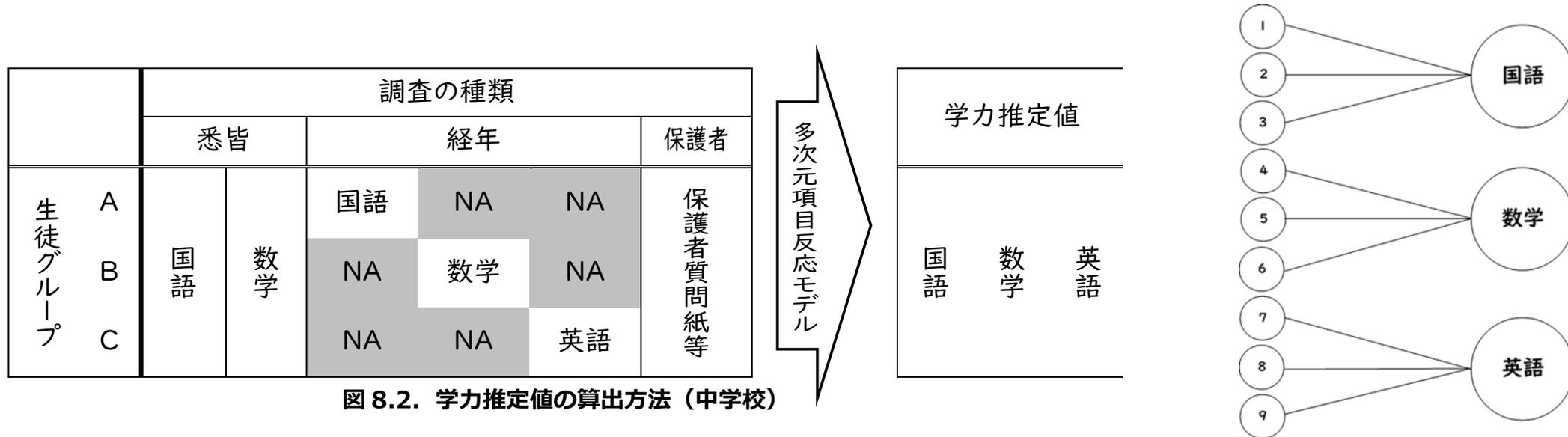


図 8.2. 学力推定値の算出方法（中学校）

「保護者に対する調査」と「経年比較分析調査」を統合して分析する
 「多次元項目反応モデル」（イメージ）

経年変化分析調査＋保護者に対する調査2

表 8.9. 相関係数

	小学校		中学校			
	国語	算数	国語	数学	英語	
多次元モデル	mle	0.339	0.362	0.302	0.347	0.396
	eap	0.377	0.384	0.353	0.369	0.377
	pv	0.348	0.359	0.326	0.349	0.349
	pv_条件付	0.388	0.404	0.347	0.382	0.414
経年調査単独	MLE_経年	0.325	0.353	0.278	0.335	0.398
	EAP_経年	0.328	0.358	0.280	0.342	0.401
	PV_経年	0.282	0.322	0.243	0.318	0.381
	PV_条件付	0.390	0.401	0.327	0.369	0.423
正答率	0.323	0.345	0.294	0.344		

(推定方法にも依るが)
 中学校の英語はもっとも
 SESと相関が高い。

※全体的に、正答率による推定は「格差」を過小推定する傾向がある。

まとめと今後について

- ① (コロナ禍にもかかわらず) 学力格差は拡大していない
- ② さまざまな格差 (保護者の学歴・世帯年収・ジェンダー・外国にルーツを持つ子ども等) に注目していく必要がある
- ③ 「保護者に対する調査」「経年変化分析調査」を同時に扱う分析手法の開発と、「英語の格差」の追究

ポイント

比較可能な調査を淡々と実施し続けたからこそ、コロナ禍を経ても日本の学力格差が変わっていないことが明らかになった。今後も、過去と比較可能な「保護者に対する調査」を淡々と積み重ねる必要がある。

補足（SES指標の構成について）

- 保護者質問紙の「父教育年数」「母教育年数」「世帯年収」「父企業規模（常勤のみ）」「母企業規模（常勤のみ）」を利用して作成。補助的に「家庭にある本の冊数」「家庭にある絵本の冊数」「教育支出」も利用している。
- 2013年度調査・2017年度調査は利用できる変数が少ないため、「教育年数」「世帯年収」から作成。過去の調査と比較する場合は、2021年度調査のSESも2013年度・2017年度調査にあわせて再計算している。
- 具体的な作成方法については、報告書第2章を参照。